

作品名 『夢をあきらめる人たちの物語 ～夏の図書館～』

著者 梶浦菊

あらすじ

図書館で働く石川はクーリングシェルター利用するお年寄りたちに困り果てていた。一般の利用者に迷惑となる行為が多いからだ。中には図書館を利用するのをやめる人もいた。よく来る神田もそのひとりだった。神田はおそらく大学野球の選手でこの先の進路に迷っている。石川もかつては野球少年だった。

文字数 4995 文字

午後を回ると、暑い気温を避けて何人もの人がこの図書館に集まってくる。

市からクーリングシェルターの指定をされてから、静かに読書もできないほどごった返すのが夏のいつもの光景となっていた。特に最近は暑さが苛烈になり、その混雑は増していた。

図書館司書の石川が、その混雑に紛れて毎日通う背の大きな青年を認識したのは8月の初めのことだった。折しも本格的に学校の夏休みが始まり、混雑がひと際ひどくなってきた頃のことだ。

彼は、いつもお昼を回った頃に現れて大きな体躯に似合わない小さな読書スペースで何かを読み込んでいた。その様子は勉強するでもなく、暇をつぶすでもなく、何か悲壮感のようなものに駆られているように石川には見えた。

図書館司書は、必要がなければ来館者に話しかけたりはしない。しかし、このところ本を読むでもなくお喋りに興じるお年寄りたちの声量がさすがに度を越してきたので、石川は仕方がなくお年寄りたちに声をかけた。特に指示があった訳ではなく、石川の独断でした行動だった。

不興そうな顔をしながらもおとなしくなったお年寄りたちは、しばらくすると、お喋りのできないところに用はないとばかりに連れだって図書館を出て行った。

市役所から図書館に火が付いたようなお叱りの連絡が入ったのは、その日のうちだった。

お年寄りたちは酷暑の中、図書館から追い出されると市役所にクレームを入れたようだった。そのうちのひとり外に出たとたん具合が悪くなって病院に行ったという。自宅の冷房代を市役所に請求してきた人もいたらしい。

「はい、申し訳ありません。仰る通りです」

電話口で平謝りする真山は市役所から2年の任期で来ている館長だった。読書好きでカズオイシグロが特に好きだそうだが、それよりなにより任期を終えて無事に市役所に戻るのが最優先、といった人物だ。そんな路傍の草のような彼を矢面に立たせてしまったことを、石川は申し訳なく思った。

翌日からは、大挙してやってきた老人たちに図書館は半ば占拠された。例の青年は、いつもの場所を昼寝をする老人に取られてしまい、行き場を失った青年は本を借りて帰ることにしたようだった。

彼が借りたのはスポーツ医療の専門書だった。石川はすぐ、野球をやっているのだろうと確信した。彼の体型を見て、うすうす思っていたが、本のやり取りをする際、手にいくつもちがも出ていたのが見えたからだ。石川も小学生から14年間、野球をやっていた。怪我さえなければ、プロの道もある筈だった。

爽やかな笑顔の裏に将来への葛藤が垣間見える青年を見送って、石川は自分とも重ね合わせながら、何とも言えずもやもやした感覚を覚えた。

※※

石川が家に帰ると、妻がソファでうたた寝をしていた。食卓にはラップをかけた夕飯が並んでいた。

石川は妻を起こさないようにそろそろと歩いて、シャワーを浴びようと部屋を出た。

「おかえり」

大きなおなかを支えるように手を添えて、妻が起き上がった。

「いいよ、そのまま」

「ごめん」

「謝ることないよ。そのまま休んで。ごはん、ありがとう」

シャワーを浴びて、食卓につく頃には夕飯は温められていた。

「ビール？」

「いや、やめとこうかな」

「あら、珍しい」

「今日、職場で野球をやっている学生さんに会ってさ」

「まさか、また始めようなんて言うんじゃないでしょうね」

「それは、ないよ」と言ってから、石川は彼を見て感じた正体不明のもやもやの話を妻にした。

「それは、まだ選択肢がある人に対する嫉妬じゃない」

「嫉妬？」

「そう、嫉妬。だってその子はまだ野球をやっているんでしょう」

「いや、もうやらないと思う。続けたとしても、いつまでもは続けられない」

「野球を生涯続けられる人なんて、ひと握りだもんね」妻は石川の方は見ずに言った。「でも、決めるのはその子よね」

「うん」と、言いつつ、まだ石川の気は晴れてはいなかった。爽やかに笑った彼の表情に嘘は感じられなかったが、それでも何か引っかかるものがあったのだ。

※※

図書館は、相変わらずの混雑だった。

彼が姿を現わさなくなっていて、1週間が過ぎていた。

「ちょっと、そこの職員さん！」

石川は自分が呼ばれているのに気が付かなかった。

「どんくさい職員さんだね」先日、石川が注意した男性高齢者の一団がにやにやしながら石川に声を掛けていた。「夕刊はまだ？ そろそろ届く頃だろ」

「夕刊を開架するのは明日以降となります」

「はあ？ 新聞は届いてすぐ読まなきゃあ意味がないだろう」

「図書館の新聞は資料として……」

「いいから、持って来い。無かったら買ってこい。どうせ購入してるんだろう」

もはや、何を言っても無駄だった。

石川は、仕方がなく裏口にある郵便受けを見に行ったが、やはりまだ新聞は届いていなかった。無論、買って来る訳にもゆかず、とにかく待ってもらいより他に仕方がなかった。

書架スペースに戻ると、今度は若い女性職員が石川の元に助けを求めに来た。

「女子学生さんが高齢の男性に怒鳴られたようで、ショックを受けてしまっていて」

「なぜ」

「読書スペースで寝ていた男性にどいてくれないかと声を掛けたら、人殺しと叫ばれたそうで。今、講読室で中村さんが慰めています」

「そんな、無茶苦茶だ」

石川は、さすがに我慢の限界が来て、その男性に注意をしに行こうとしたが、すかさず真山に止められてしまった。

「石川君、夏の間だけ我慢しよう。皆、来たくてここに来てる訳じゃあないんだから」

「でも……」

真山は何も言わず首を横に振った。もう、理屈も道理も通じないのだった。

「少し休憩を頂きます」

石川は、まだ取っていないかった昼休憩を使って頭を冷やして来ることにした。後ろから「職員さあん」

という男性高齢者の声と笑い声が聞こえたが、気にせず外に出た。

外は湯に浸かるような暑さだった。むっとした空気に包まれて、風が吹いても暖房を焚かれているように感じた。これでは、高齢者でなくても具合が悪くなるだろう。

石川は、少し自分の怒りを反省して、たまに行く近くの喫茶店に足を向けた。静かなボーカルジャズをかけるお気に入りの場所だった。この日、入った時はステイシー・ケントの『the ice hotel』がかかっていた。この暑い夏には確かにうってつけだ。

だが、その透明感のある透き通ったボーカルの声も石川の耳には入らなかった。そこに、あの青年がいたからだ。彼はすっかり氷の溶けたアイスコーヒーを脇において分厚い本を読んでいる最中だった。

石川はナポリタンとセットのアイスコーヒーを頼み、すぐに出てきたサラダを口に含みながら、彼を見て感じる違和感の正体を自分なりに考えてみた。その時、青年は大きく伸びをしてぬるくなったアイスコーヒーを一気に飲み干した。

手元のスポーツ医療の専門書は、借りてから1週間はたっている筈だったがそれほど読み進められてはいないようだった。石川が目を向けたのと同時に、伸びを済ませた青年がこちらを向いた。石川は笑顔で会釈をした。

石川は、食べ終わった皿を店員さんに片付けてもらおうと、あらためて「石川と言います」と自己紹介をした。青年の名前が神田だということは、本を借りたときの会員データから知っていた。

「石川さんも野球をやっていたんですね」

「分かりますか」

「ええ、図書館のひとつには身体がデカすぎますし」

石川と神田は同じタイミングで笑った。

「踏ん切りがつかないんじゃない」石川は、すぐに本題に切り込んだ。「本も、あまり読めていないようだし」

「勉強はあまり得意じゃないんです。続ければ必ず夢は叶うって言うってくれる人もいて」

やっぱり、と石川は思った。本を読んでいるようで、読んでいない。ただ、時間を潰しているだけ。それが、違和感の正体だった。

石川は、言わなければいけないと腹をくくった。

「諦めなければダメだ」

「え？」と、言った神田の顔は本当に意外そうだった。

「諦めた方がいい。きっと、続けられない」

「大人はこういう時、諦めるなって言うのが普通じゃないんですか。俺のことなんか、なにも知らないくせに」

「知らないよ、君のことなんて。知らないからはっきり言う。なるべく早く、諦めた方がいい。楽しむために続けるのならいいが、それで食っていくことはできない」

「ふざけないでください！ 俺はまだ諦めませんから」

神田はそう言って店を出て行った。石川は、しばらく席で動かずじっとしていた後、妻の“嫉妬”という言葉思い出した。これがただの嫉妬なのか、親身になった助言なのか、それが分かるのはきっと数年後なのだろう。だが、石川には軽はずみに「夢を諦めるな」と言う気にはなれなかった。その言葉に呪いのように苛まれた人間を何人も知っているからだ。

※※

図書館の混雑は解消されるどころか、ますますひどくなっていた。

真山は最近市役所に行っている事が多く、口さがない職員からはトラブルから逃げているんじゃないか、という言葉も上がっていた。そのため自然と注意が必要な来館者対応は、石川の役割となっていた。

この日も、例の”昼寝おじいさん”と”団体さん”がケンカになっていると呼ばれた。

溜息まじりに読書スペースに行くと「べらべらうるさくて寝られない」「ここは寝る場所じゃない」といった言い合いになっていた。石川は途方に暮れてしまった。

この状況にほとんど嫌気がさして、クビになっても構わないと思ったのは、おそらく先日の神田との会話が影響しているのだろう。人には偉そうに説教しながら、自分はこんな理不尽にさえ目をつぶって生きている、そう、思われなくなかった。

傍目にも何か決意した表情が分かったのだろう、石川の周りの職員は彼を止めようとしたが、その勢いはそれくらいでは抑えきれなかった。

ケンカの真ん中に割って入った石川は、両側のお年寄りたちを順繰りに睨みつけた。

その時、唐突に館内放送が流れた。貸出カウンターまでの呼び出しの放送だった。声の主は真山の声に違いなかった。

『以上の方々、今後シェルター利用の際は利用予約が必須となりますので、すぐにカウンターまでお越しの上、登録をお済ませください。尚、お名前はご家族のご協力によりお教えいただいております』

声にはならない歓喜の波が、一気に図書館全体を覆ったのを石川は感じた。お年寄りたちは戸惑いながらもすすり泣くカウンターのほうへ向かった。そこには、おそらく各自のご家族だろう、4~5人の人が怒気を含んだ表情で立っていた。彼らは、「恥をかかせないでください」とか、「良い歳して、なにしてるの」などと小言を言われながらカウンターに並んだ。

真山の脇には眼鏡をかけたYシャツ姿の男がいた。

「市民サービス課の課長さんよ。真山さんの同期らしくて、この予約制の相談をずっとしてたのよ」

と、古参の嘱託職員さんが教えてくれた。

「じゃあ、ずっと市役所に行っていたのは」

その女性が大きく頷いた。

「言ってくればいいのに」

「真山さんは手柄とかそういうの、苦手だから」

すっかり人気なくなった閉館間際。石川が返却ポストの中身を整理していると、真山が現れた。

石川はすぐにお礼を言った。あその後、市役所の課長と姿が見えなくなって、話も出来ていなかったのだ。

「お礼を言われるような事はしていませんよ。人は立場ごとにやるべき役割が違うだけで、石川さんは自分の役割を、私は私の出来る事をしたまでです」

それでも石川は感謝の言葉を伝えたかった。

「お礼を言うのは私のほうですよ。気付かされたのは石川さんがあのお年寄りたちに文句を言いに行った瞬間ですから。私は恥ずかしながら、問題意識を持っていなかった。だから、これは石川さんの功績です」

それから、と真山は言葉を継いだ。

「これを彼に渡してみてください」

そう言って、一冊の本を石川に手渡した。タイトルは『馬敗れて草原あり』とある。筆者は寺山修司だ。

「野球のことばかりだと、息が詰まるでしょう」

「どうして彼のことを」

「ステイシー・ケントの『the ice hotel』の作詞はカズオ・イシグロだね。よくリクエストするんですよ」

「あの時の」

「あの喫茶店のナポリタンは絶品です」

石川は返す返すも、自分の若さを恥じた。石川はやはり”嫉妬”していただけかもしれない。諦めきれないのは、自分の方なのかもしれない。

彼にこの本をあの喫茶店で渡すとき、できれば自分の好きな曲をリクエストしようと、石川は考え始めていた。

(了)